

大岩・三輪神社を
まえた紙問屋

◇藩主の崇敬篤く

大岩地区は、緒川地域の北西端に位置し、栃木県那須烏山市に接しています。ここ大岩の鎮守は三輪神社です。その名のとお

り、奈良県にある三輪神社（大神神社・おおみわじんじや）を勧請してきた神社で、もとは国神社でしたが、一村一社制を進めた水戸藩二代藩主徳川光圀により、元禄九年（一六九六）に大岩村内の小社二十二社を合祀して三輪神社一社として知られる家臣佐々宗淳に命じ



▲三輪神社社殿

て大和国（奈良県）三輪山に人を派遣し、杉の実を採取し、この地で育てたものを境内に植林したとされます。

光圀は「諸国漫遊」とは行かないまでも領内巡視には力を入れていて、当市域を中心とする水戸藩北西山間部に九度にわたって巡村しています。その途次に神社を巡見して寄進をしたり、社殿や仏像などに修理を加えたりしています。

その後、奈良の大神神社からもたらされた杉は鎮守の森として生長していきました。一方、社殿は寛延三年（一七五〇）に街道沿いに遷した時に建て替えられました。拝殿内にはそのときの棟札の写しと思われる額が掛けられています。これによれば、建て替えの出資者（檀那）というは「水戸宰相宗翰公」つまり五代藩主宗翰であることが分かります。

それから四十年たった寛政三年（一七九一）には宗翰の子で六代藩主治保が檀那となって拝殿の修築を行いました。治保は歴代藩主の業績を非常に大切にしました。それらを踏まえて農政政策や庶民への福祉に手厚い保護を加えたことがその事績からうかがわれます。熊本藩細川家や米沢藩上杉家など「名君」とうたわれた大名と親交を持ち、彼らの政治姿勢について積極的に学んでいたようです。光圀と齊昭に代表される水戸藩主ですが、治保も「名君」として領内各地に足跡を残しました。



▲5代藩主宗翰の名がある寛延3年棟札の写し



▲裏面に6代藩主治保の名がある寛政3年の石碑

◇大岩村の顔役たち

五代・六代藩主がかかわった二度以外にも幾度かの修築がありました。村側でそれを差配したのが庄屋や組頭を務めた竹内源助や佐藤善次衛門、田沢氏、岡崎氏、広木氏といった諸家でした。

江戸時代の大岩は周辺諸村とともに和紙の生産、出荷が盛んな地域でした。水戸藩の財政収入の三分の一を占める紙及び紙の原料となる楮は、当市北西部と大子町南部、栃木県的那須烏山市、那珂川町を中心とする地域で生産され、出荷されました。「日本一」と評される最高級の楮（那須楮）ですかれる当地の紙

は江戸時代には高値で取引されました。当時、紙すき農民から紙を買い集め、水戸藩や江戸、大坂といった大都市に出荷していた紙問屋が当地にも数多くありました。紙は藩内屈指の富豪をこの山村から生み出したのです。隣接する小舟村には幕末の安政二年（一八五五）頃には紙会所がおかれ、近隣の村々からすぎ出される紙を紙買方役人が一手に買い集め、江戸へ売りさばっていました。小舟村の紙会所はその拠点となった場所です。

三輪神社の寛延三年棟札の写しと、寛政三年の修築記念碑に名を連ねる竹内家と佐藤家は、まさにその時代を最前線で生きた地元紙問屋でした。

藩に公許された紙問屋は、多い時で二十軒ほどになりましたが、竹内家は最初に公許された五軒のうちの軒で、早くから江戸とかかわりを持ちました。明和元年（一七六四）に江戸紙問屋 村林善兵衛の店で、日本各地で産する紙を書き上げた資料を写し、さらに自らの知見を織り交ぜて『諸国紙日記』（寛政五年・一七九三）を著しました。その後、嘉永七年に常陸太田の沼尻清兵衛が補足して現在の形になっています。江戸時代に流通していた紙についてわかる貴重な史料として紙の歴史を研究する際の基本文献の一つとなっています。

歴史民俗資料館大宮館 ☎52-1450